『東京大学言語学論集』30 (2010.9) 9-26

現代トルコ語における“o”系列指示詞の特徴について*
ー直示用法を中心にー

バルプナル・メティン

キーワード：トルコ語、指示詞、共通の空間、直示用法、直示性の度合

要旨

本稿では、「共通の空間」及び「聞き手による対象の認識」という 2 つの観点から、トルコ語の指示詞の直示用法を分析し、現代トルコ語の o 系列の指示詞には、以下の特徴が見られることを明らかにする。o 系列の指示詞は：(i)話し手から遠い対象ではなく、「非共通の空間」内の対象を指示する指示詞である。(ii)聞き手が対象に気付いている時だけでなく、聞き手が対象に気付いていない場合にも用いられる。(iii)指さし等の直示的(非言語的)指示だけでは不十分で、言語的補助を必要とする場合がある。(iv)o, şu がいずれも使用可能な状況では、şu は対象に対する話し手の心理的な共感性/共有性を含意するが、o にはそのような心理的含意は感じられない。(v)特定不可能な対象(目で見ることができない対象、又は目前にない対象)を非直示的に指示することができる。更に、上記特徴(iii), (iv), (v)は、o が「非共通空間」の指示詞であるという(i)の特徴の帰結であることを論じる。

1 はじめに

トルコ語には bu, şu, o の 3 つの指示詞がある(表 1)。これらの派生形である bura/burası, şura/şurası, ora/orası は指示代名詞、böyle, şöyle, öyle と bunca, şunca, onca は指示形容詞、bu, şu, o は指示代名詞・指示形容詞として用いられる。

表 1 トルコ語の指示詞

	bu-	şu-	o-	
-ra, -rası	bura/burası	şura/şurası	ora/orası	場所
-(y)le	böyle	şöyle	öyle	性状
-(n)ca	bunca	şunca	onca	量
-	bu	şu	o	もの・人

本論では、紙数上の都合により、場所と、もの・人に言及する場合に用いる指示詞のみ取り扱うことにする。以下に、トルコ語における指示詞の先行研究を見ていく。

2 現代トルコ語の指示詞の先行研究

トルコ語の指示詞における従来の研究・解釈は、大きく二つのグループに分類することができる。(A) 単一の規準に基づいて各系列を三項に対立させるもの(三項対立)、(B) 各系列を先ず一つの規

* この原稿の完成にあたっては、和田道夫先生に助言とコメントを頂き、林徹先生にコメントを頂きました。また、トルコ語の例文に関しては BALPINAR Zafer, BALPINAR Çetin, ERSİN İlker, ARTAÇ Sultan Ferizan に判断をもらいました。ご協力いただいた方々に感謝の意を表します。

準に基づいて一対二に二分し、さらにもう一つの異なる規準を用いるもの(二つの連続した二項対立)。

(A)では、日本語の指示詞の用法と同様に、a) bu, şu, o の使い分けを話し手から指示対象までの「距離」によって説明しようとする距離区分説(服部 1961、阪田 1971)と、b)「人称」によって説明しようとする人称区分説(三上 1970)が見られる。前者の場合、話し手の近くにあるもの bu、話し手から少し離れているもの şu、話し手から見て遠くにあるものを o で指し示すとされている(Lewis 1967、飯沼 1995、Kornfilt 1997、Ergin 2002、Banguoğlu 2004)。また、後者では話し手(1 人称)の近くにあるものを bu、聞き手(2 人称)の近くにあるものを şu、他者(3 人称)の近くにあるものを o で指示するとされている(Kissling 1960)。さらに、a)の説明を基準にしているものの şu と o を区別する上で、(1)(2)のように、別の基準を用いる解釈も存在する。

(1) Jansky(1943)、Peters(1947)

bu　話し手に近い対象を指示

şu　話し手からやや離れているが、目に見える対象を指示

o　話し手から離れており、かつ目に見えない対象を指示

(2) 竹内(1997)

bu　話し手に近い対象を指示

şu　話し手からやや離れている、目前の対象を指示

o　話し手から離れている、目前にない対象を指示

しかし、a)と b)それぞれに対して、Underhill(1976)、Hayasi(1988)等は、şu は中距離の指示詞ではないという点について、Bastuji (1976)、林(1984)、林(1989) は bu, şu, o の用法はそれぞれ 1 人称・2 人称・3 人称と関係付けられないという点で反論を挙げている。そして、これらの著者たちはトルコ語の指示詞を説明する上で、2 つの異なる規準を用いるとする上記(B)案を提案している。(B)には、「bu・şu 対 o」という対立と「bu・o 対 şu」という対立がある。

2.1「*bu・şu* 対 *o*」の対立

bu, şu, o の用法に関して Bastuji(1976)は、『ビザンチンの財宝』[1]というトルコ語の小説及びトルコ語のコーパスを利用しての分析を行った。その結果、bu・şu 対 o は被指示物が「伝達の空間」[2]にあるかないかの対立を示しており、さらに bu は話し手の空間・時間に関わるという点で再帰的、şu は話し手の空間・時間に言及しているが、対象を相手に提示する点で他動的であるという。

---

[1] Oktay Akbal(1953[2003]) *Bizans Definesi.* Can Yayınları.

[2] Bastuji (1976)は伝達のプロセスに参加する(「伝達の空間」の中にある)主題・ものに言及する場合 bu, şu、伝達のプロセスに参加していない(「伝達の空間」の中にない)主題・ものに言及する場合 o を用いるとしている。「伝達(会話)の空間(espace de communication)」という概念については明確な定義は見当たらないが、彼女は発話の場所と時間と関係があり、1 人称・2 人称(発話の当事者)で構成する空間を「伝達(会話)の空間」としているようである。

(3) Bastuji(1976)

bu　伝達の空間の中にある対象を指示/再帰的直示

şu　伝達の空間の中にある対象を指示/他動的直示

o　伝達の空間の中にない対象を指示

bu, şu, o の用法を Bastuji(1976) と同様な対立関係で捉えている研究には柴田(1991)がある。柴田(1991)は、話し手に近い(心理的)空間にあるものを bu 又は şu で、話し手から遠い(心理的)空間にあるものを o で指示するとし、又 bu と şu との区別に関して、前者は話し手によって確認された対象を、後者は未だ確認されていない対象を指示する場合に用いられるとしている。

(4) 柴田(1991)

bu　話し手に近い、確認された対象を指示

şu　話し手に近い、確認されていない対象を指示

o　話し手から遠い対象を指示

また、林(2008)も Bastuji(1976)及び柴田(1991)と同様に、bu, şu, o の用法を「bu・şu 対 o」の対立関係で捉えようとしている。林(2008)は şu による指示が極めて短期間のうちに達成されるということと、şu によって導入された対象は再び şu によって指示されることがないということから、「şu は時間的近接性を表す指示詞である(p. 1)」という結論を導き出している。この意味で、林は şu を時間的に近称の指示詞であるとし、空間的に近称の指示詞である bu と同等に扱うが、遠称の o と区別しているのである。

2.2「*bu・o 対 şu*」の対立

トルコ語の指示詞について Underhill(1976)、林(1984)、林(1989)、Özyürek (1998)、西岡(2006)は、bu, şu, o の用法を bu・o 対 şu のように対立させ、その後 bu と o を区別すると主張している。

Underhill (1976)はジェスチャーという規準に基づいて、şu で指示されるものはジェスチャーを伴う場合であり、bu 又は o で指示されるものはジェスチャーを伴わない場合であると述べており、かつ bu は話し手に近いもの、o は話し手から遠いものを指示するのに用いるとしている。しかし、ジェスチャーを伴う bu 又は o の用法が存在する等という点で、Underhill (1976)の主張が反論されている(Hayasi 1988[3])。これに対し、林(1984)、林(1989)は、şu の用法に注目しつつ、聞き手が「対

[3] Hayasi(1988)は、上で述べた Bastuji(1976)の「指示対象がコミュニケーション空間の中にある」という基準と、林(1984)の「指示対象が既にディスコースに導入されている」という2つの基準を用いて、前者の基準のもとでは şu, bu 対 o の対立、後者の基準のもとでは şu 対 bu, o の対立が見られるとしている。これは一種の交差分類であり、本稿のアプローチに近い考え方であるが、本稿で考えている交差分類とはその予測するところが異なるものであることは言うまでもない。又、本稿で用いている「共通の空間」という概念は Balpınar(2010)で独自に提案された概念である。Hayasi(1988:232)は、コミュニケーション空間について、"the common space formed by interlocutors(対話者たちによって形成された共通の空間)(和訳は筆者)"としているが、本稿で言う「共通の空間」は"the shared space determined by the speaker(話し手によって決定される共通/共有の空間)"という概念である。更に、Bastuji(1976)、Hayasi(1988)の考えている空間は、話し手と聞き手で構成する空間の和(sum)として捉えられているが、本稿でいう「共通の空間」は話し手と聞き手で構成する空間の共通部分(intersection)として定義されている。

象に既に気付いているかどうか」という基準に基づいて bu, şu, o を使い分ける案を提唱している。bu 及び o は聞き手が既に対象に気付いていると話し手が判断した場合に、şu は聞き手が未だ気付いていないものと話し手が見做した場合に用いるという。また、聞き手が「対象に既に気付いているかどうか」という基準を次のように「対象が既にディスコース[4]に導入されたかどうか」という基準と置き換えることによって文脈指示にも適用できる一般化を行っている[5]。

(5) bu/o　既にディスコースに導入されていると話し手が見做している対象を指示。
　　şu　　未だディスコースに導入されていないと話し手が見做している対象を指示。

更に、bu と o との違いに関して林はそれぞれ話し手に近い・遠いものを指示するのに用いるとしている。

林による以上の主張と似ているものは Özyürek (1998) に見られる。Özyürek (1998) は、şu は聞き手の視覚的注目 (visual attention) が対象にない場合に、bu 及び o は聞き手の視覚的注目が対象にある場合に用いられるとしている。又、話し手から指示対象までの距離に基づいて bu (近称) 及び o (遠称) の使用が決定される一方、話し手から指示対象までの距離に関係なく (話し手に近いものでも遠いものでも) 用いられるのは şu であると述べている (Özyürek 1998:613)。

最後に、トルコ諸語 (ウズベク語・カザフ語・新ウイグル語・トルコ語・アゼルバイジャン語) の指示詞を扱った研究として西岡 (2006) が挙げられる。西岡 (2006) は指示詞の用法を a) 現場指示用法 (発話現場で指示対象が見える場合) と b) 非現場指示用法 (発話現場で指示対象が見えない場合) に分け、後者をさらに独立指示用法 (先行言語表現が不要な場合) と非独立指示用法 (先行言語表現が必要な場合) に分類する。そして、a) の場合、トルコ語の指示詞 bu (近称) 及び o (遠称) は (談話へ) 導入済みの要素を指示するために用いるのに対し、şu (近称/遠称) は要素を談話へ新規に導入するために用いるという。また、b) に関して、独立指示用法の şu は a) の şu と同様に要素を談話へ新規に導入するのに用いるとされる。これに対して非独立指示用法の場合、bu は「話し手自身の直前の発話内の構成素を指示」・「対話相手の発話全体を指示 (textual deixis)」し、o は「話し手自身の直前の発話内の構成素を指示」・「対話相手の発話内の構成素を指示」するという。

以上の諸研究では「bu・şu 対 o」の対立と「bu・o 対 şu」の対立のうち、後者の立場を取る研究者の方が圧倒的に多いようである。しかし、どちらの対立が基本であるかという点については未だ明らかにされていない。本稿では、「共通の空間」及び「聞き手による対象の認識」という 2 つの観点から、トルコ語の指示詞を素性分析の手法を用いて交差分類してその用法を分析し、現代トルコ語の o 系列の指示詞には、以下の特徴が見られることを明らかにする。o 系列の指示詞は：(i) 話し手から遠い対象ではなく「非共通の空間」内の対象を指示する指示詞である。(ii) 聞き手が対象に気付いている時だけでなく、聞き手が対象に気付いていない場合にも用いられる。(iii) 指さし等の直示的 (非言語的) 指示だけでは不十分で、言語的補助を必要とする場合がある。(iv) o, şu がいずれ

[4] ディスコースとは対話者たちがお互いに共有していると思い込んでいる場面及び文脈に関する知識である (林 1984:57)。

[5] バルプナル (2006:36) は林 (1984) (1989) の「ディスコースへの導入」いう基準に対し、「聞き手が対象に気付いているかどうか」という基準を重視すべきであるとしている。

も使用可能な状況では、şu は対象に対する話し手の心理的な共感性/共有性を含意するが o には、そのような心理的含意は感じられない。(v)特定不可能な対象(目で見ることができない対象、又は目前にない対象)を非直示的に指示することができる。更に、上記特徴(iii), (iv), (v)は、o が「非共通空間」の指示詞であるという(i)の特徴の帰結であることを論じる。

なお、本稿では「直示用法」に関して以下の定義を採用し、現代トルコ語の o 系列指示詞を中心に議論を進めていくことにする。

(6)直示用法の定義：「外界において知覚できるもの、典型的には目に見えているものを直接指し示す用法を直示用法(deictic use)と呼ぶことにする」(金水(他)2002:218)

次節では、bu 及び şu は「共通の空間」の対象を指示するのに用いられるということを主張する。又、「共通の空間」の対象とその対象の直示性(指さし等の直示的な方法で対象が指示可能であるということ)について述べる。続く 4 節と 5 節では、「共通の空間」の観点から o 系列指示詞の用法を検討し、o が「非共通の空間」の指示詞であり、bu, şu に比べて直示性の弱い指示詞であることを指摘する。最終節では、以上の議論をまとめる。

3「共通の空間」と *bu*・*şu* の用法

本節では、「共通の空間」という概念に基づいて bu, şu の直示用法を検討する。結論から先取りして言えば、「共通の空間」内にあるもので、聞き手が気付いていると話し手が判断した対象を指示する場合に bu を用い、聞き手が気付いていないと話し手が判断した対象を指示する場合に şu を用いるということである。便宜上、先ず şu の用法について述べることにする。次の用例を見ていただきたい。

(7) a. (聞き手が話し手のすぐ隣にいる場面で、話し手が聞き手の腰にあるバッグに触って)

Hasan, {bu/şu/*o} çanta-da ne var?

ハサン、 この バッグ-位格 何 ある

ハサン、(あなたの)このバッグの中に何があるの?

b. (話し手が大声を出さない限り聞き手が聞こえない程両者が離れている場面で、話し手は聞き手の腰にしているバッグを指しながら、<u>大きい声</u>で)

Hasan, {*bu/*şu/o} çanta-da ne var!

ハサン、 その バッグ-位格 何 ある

ハサン、(あなたの)そのバッグの中に何があるの!(Balpınar 2010:193)

(7a)では隣にいる聞き手が腰にしているバッグを bu とも şu とも指示できるのに対し、(7b)[6]では

[6] (7b)はやや特殊な状況ではあるが、şu を使用できないと話し手が推測するに充分な状況である。又、(7b)は「Hasan <u>belindeki</u> {*bu/*?şu/o} çantada ne var!(腰にあるそのバッグの中に何があるの!)」と下線部の言語的限定要素を加えたほうがより自然である。

同じバッグでも両者が離れている場合、何故 şu を用いることができないかということに関して、対話者たちがコミュニケーションに無理が生じる程離れているような場合、şu は使用できないと考えることができる。しかし一方で、両者が遠く離れている場合(下記(8a))でも、şu が使用可能なこともある。

(8) a. (両者が遠く離れている場面の中で、話し手は遠くにある山を指して聞き手〈Ahmet〉に)

Ahmet, {*bu/şu/*?o} dağ-a bak!
アフメット あの 山-与格 見ろ
アフメット、あの山を見ろ!

b. (テーブルに並んで聞き手と話し合っている場面で、話し手はそのテーブルの上にある一枚の写真を聞き手〈Ahmet〉に示して)

Ahmet, {*bu/şu/*o} fotoğraf-a bak!
アフメット この 写真-与格 見ろ
アフメット、この写真を見ろ! (Balpınar 2010:194)

(8a)では指示対象(山)が話し手からも聞き手からも遠く離れており、話し手にも聞き手にも直ぐに発見できるようなところにある。又、(8b)では、話し手は聞き手と同じテーブルに並んでおり、かつ指示対象(写真)が両者のすぐ目の前のところにある。このように、(7b)と異なり、指示対象が同じ条件で話し手と聞き手によって共有できる空間にある場合に、話し手は「聞き手がまだ気付いていない」と判断したその対象を şu で指すことができると、Balpınar(2010)は指摘している。そして、同様な条件で聞き手と共有できる空間のことを「共通の空間」と呼んでいる。

(9) 「共通の空間」:同様な条件[7]で話し手と聞き手が共有できる(と話し手が判断する)空間[8]。

以上のように考えると、(7b)の場合、şu が用いられないのは、指示対象が「共通の空間」に存在しないからであると見ることができる。つまり、バッグは話し手から遠く離れており、かつ聞き手に近いため、その対象を聞き手とまるで共有しているかのような空間(注7の(i)の空間)を作り出すことができないということである。

「共通の空間」という概念は bu の使用条件を探る場合にも役立つ。具体的には、(7a)では指示対象(バッグ)は話し手及び聞き手両方に一様に近いため、「共通の空間」が設定可能となる(この場合、

[7] 同様な条件とは、(i)「空間内の指示対象が話し手にも聞き手にも(心理的・物理的に)一様に近い或いは一様に遠い」と話し手が見做している場合、(ii)空間内の指示対象が談話で繰り返し用いられ、談話のトピックになっている場合、(iii)「発話現場において目に見えておらず、未だ談話に導入されていない(観念上の空間の)対象のうち、聞き手にも共有できる」と話し手が認めた対象がある場合、の三つの場合を意味する。(iii)については詳しくは Balpınar (2010:186)を参照のこと。

[8] 本稿で言う「共通の空間」は Bastuji (1976) の言う「伝達の空間」とは「共有可能性」という点で明確に異なる概念である。彼女の言う「伝達の空間」は基本的には、対話者(1 人称と 2 人称)が構成する物理的発話空間と考えることができる。一方本稿で言う「共通の空間」は、対話者による物理的・心理的「共有可能性」に基づいて発話者の判断によって構成される空間概念である。その意味では注 7 で述べた(i)～(iii)の「同様な条件」の定義は、「共有可能性」の条件と位置づけることができる。本稿で言う「共通の空間」については、注3も参照。

buは「話し手がバッグに触った」と聞き手が気付いた直後に用いられ、şuは話し手がバッグに触ると同時に用いるというニュアンスがある)。又、(7a)と同じく、下の(10)(11)でも、話し手は聞き手が既にその存在に気付いており、さらに話し手にも聞き手にも(空間的・心理的に)一様に近いと話し手が判断した対象((10)の場合それぞれの時計、(11)の場合「共通の空間」全体、(12)の場合景色)をbu系列で指し示している。従って、これらの用例においても指示対象は「共通の空間」内のものとして見ることができる(注7の(i)の場合)。

(10) (話し手が隣にいる聞き手に時計コレクションを見せる場面である。話し手は聞き手の目の前で腕時計を3個鞄から取り出し、直ぐ手前にあるテーブルの上に置いてから、一つずつその時計を指しながら)

{bu/*şu/*o}-nu İsviçre-den, **{bu/*şu/*o}**-nu Japonya-dan, **{bu/*şu/*o}**-nu da
これ-対格 スイス-奪格 これ-対格 日本-奪格 これ-対格 も
geçen sene İtalya-dan al-dı-m.
去年 イタリア-奪格 買う-過去形-1人称単数
これをスイスで、これを日本で、そしてこれを去年イタリアで買いました。

(11) (話し手は観光で来たところで周りの景色を見ながら、隣にいる聞き手に)

Ne ilginç ülke **{burası/*şurası/*orası}**.
何 面白い 国 ここ
ここは何て面白い国だ! (Öğüt 2004:278)

(12) (登山の場面で、話し手と聞き手が山の頂上に到着し、目の前に広がる美しい景色に気付く。しばらく二人でその美しい風景を見て、話し手は隣の聞き手に)

{bu/*şu/*o} manzara-yı gör-mek herkes-e nasip ol-maz...
この 景色-対格 見る-辞書形 みんな-与格 機会がある-否定形
このような絶景は誰にでも見れるものではない。

次に(13)を見てみよう。(13)では、指示対象(髪)は比較的に話し手Bに近いため、一見「共通の空間」が設定不可能であるかのように見える。

(13) (話し手Bは変な髪を付けたまま、話し手Aがいる部屋に入る。そこで、話し手Aに笑われた話し手Bは髪を外して手に持つ。その時)

A: Tak canım... çıkar-ma hemen. Yakış-ıyor sana.
つける 感動詞... 外す-否定形 すぐに。 似合う-現在形 君(与格)
つけてくれよ...すぐに外さないで。君に似合うよ。

B: Plastik, şey... öhööö, sentetik değil mi **{bu/*şu/*o}**?
ビニール、ええと コホン, 合成物質 否定形 疑問形 これ?

ビニール、ええと…コホン、これは合成物質じゃないか? (Öğüt 2004:75)

この場合、話し手Aは話し手Bが部屋に入ってきたときに、話し手Bが付けた鬘に気付き笑い始める。話し手Bは鬘を外し、手にしている対象(鬘)を話し手Aにbuと指しているのである。しかし、指示対象(鬘)は、話し手Bが話し手Aの部屋に入ると同時に談話に導入され、繰り返し言及された後、話し手BによりbuでTで示される。よって、(13)では鬘を談話のトピックとして見ることができ、同じ条件で共有できるものとして捉えることができる(注7の(ii)の場合)。

以上の議論において注意すべきことは、「共通の空間」にあると話し手が判断した対象の指示に当たって、指さし等の直示的な指示方法が使用可能であるという点である：(7)(8)で見たように、聞き手が未だ気付いていないと話し手が見做している対象を指示する場合、対象の特定のために指さし等の非言語的な限定条件が必ず必要となる。一方、(10)-(13)の場合、話し手も聞き手も対象の存在に気付いていると話し手が判断したため、一見指さし等の使用が不要であるかのように思われる。しかし、(10)のデータからも容易に分かるように、聞き手が指示対象の存在に既に気付いていると話し手が見做している場合でも、対象の特定のために指さしが必要とされる。又、(11)では空間そのものを示すような両手の動きを伴う手振り、(12)では風景を示すような手振り、(13)では手にある鬘を聞き手に見せようとする動作が可能である。

以上、直示用法においてbu及びşuは「共通の空間」の対象を指示するのに用いられることを見てきた[9]。そのような対象で、聞き手が既に気付いていると話し手が判断したものをbuで、聞き手が未だ気付いていないと話し手が判断したものをşuで指示すると指摘した。さらに、「共通の空間」の対象は(非直示的な指示方法ではなく)指さし等の直示的な方法で指示されるということについて述べた。次節では、oはどういう場合に用いられるかということについて考えることにする。

4「共通の空間」と*o*の用法

前節では、「共通の空間」にあり、かつa) 聞き手が気付いていると話し手が判断した対象を指示する場合、b) 聞き手が気付いていないと話し手が判断した対象を指示する場合を見た。以下の表2で言うと、a) は①に、b) は②[10]にあたる。(①は用例(10)-(13)に、②は用例(7a)(8)に相当する)。本節では、「非共通の空間」にあり、かつc) 聞き手が気付いていると話し手が判断した対象を指示

[9] 本稿では詳しく触れないが、(10)(11)(12)のbuと(13)のbuは区別して取り扱う必要があるだろうと考えている。2つのbuは現場指示用法という点では共通しているが、前者のbuは(対話者たちによる)言語テキストの生成に用いられており、一方後者のbuは対話者たちが生成した言語テキスト内の要素を現場指示するのに用いられている(その意味では後者のbuは一種の文脈指示用法と考えることができる)。こうした観点に立つなら、言語テキスト生成のための指示詞(用法)と生成済みの言語テキスト内の要素を指す指示詞(用法)は区別して考える必要があるだろう。本稿で扱う指示詞(bu, şu, o)の用法は、言語テキスト生成のための指示詞の用法であり、「共通の空間」や「聞き手による認識」という概念は、言語テキスト生成のために必要とされる概念と位置づけることができる。これに対して、(13)のbuは言語テキスト内に導入済みの要素を現場で指示するものであり、従って現場指示用法における一種の文脈指示用法と考えることができ、その場合に必要となる概念は(「共通の空間」ではなく)話し手から近いか遠いかの区別ということになるだろう。詳細は機会を改めて論じる予定であるが、şuは言語テキスト生成にのみ用いられ、bu, oは言語テキスト生成と言語テキスト内の要素の現場での指示の両方の場合に用いられると結論付けられると考えている。このように考えるならば注7(ii)の条件は「共通の空間」の条件としてではなく、(広い意味での)文脈指示の条件として捉え直す必要があるだろう(和田道夫先生の個人談話による)。

[10] şuは、聞き手が対象の存在に気付いていると判断する場合にも使用可能である。しかし、そのような用法はşuの基本的な意味から拡張したものとして捉えることができる。詳細についてはBalpınar (2010:187-188)を参照のこと。

する場合(ケース③)と、d) 聞き手が気付いていないと話し手が判断した対象を指示する場合(ケース④)を見てみることにする。

表2　現代トルコ語における(言語テキスト生成時の)指示詞の使い分け

- 「共通の空間」の対象に
  - 聞き手が気付いていると話し手が判断した場合　*bu*　①
  - 聞き手が気付いていないと話し手が判断した場合　*şu*　②
- 「非共通の空間」の対象に
  - 聞き手が気付いていると話し手が判断した場合　o_1　③
  - 聞き手が気付いていないと話し手が判断した場合　o_2　④

表2の「共通の空間」、「聞き手による認識」をそれぞれ正と負の値を持つ素性として分析するなら、現代トルコ語の(言語テキスト生成時における)指示詞の体系は次の表3のように交差分類としてあらわすことができる。

表3　現代トルコ語における(言語テキスト生成時の)指示詞の体系[11]

共通空間 / 指示対象の認識	＋	－
＋	① *bu*	③ o_1
－	② *şu*	④ o_2

先ず、ケース③について考えてみよう。従来の研究では、直示用法のoは、(i)聞き手に属するものを、(ii)話し手から離れているものを指示するのに用いるという説明が見られる(林 1989)。それは、(14-16)のようなデータからも直ぐに確認できる。

(14) (話し手が聞き手と立ち話をしている場面で、聞き手(マルコ)がポケットから取り出した時計に気付き、聞き手に)

Ne　güzel　saat　{*bu/*şu/o}　Marko　Paşa

何　美しい　時計　それ　マルコ　閣下

マルコ 閣下、それは何て美しい時計でしょう。(Öğüt 2004:221)

(15) (友達<Eser さん>が高い壁の上に立っていることに気づき、話し手は友達の Eser さんに)

Eser,　ne　iş-in　var　{*bura/*şura/ora}-da?

[11] トルコ語の指示詞を交差分類のもとで検討するように示唆して下さった和田道夫先生に感謝します。

エセルさん、何　仕事-2 人称単数　ある　　そこ-位格
エセルさん、そこで何をしていますか。(Eldem 2004:468)

(14)では聞き手がポケットから時計を取り出している時に、その様子を見た話し手が、聞き手に属する時計を o で指示しているのである。(15)は、話し手(エセルさんの友達)と聞き手(エセルさん)が上下に離れているところにいる場合であるが、話し手から離れた聞き手の居場所を話し手は ora で指し示している。また、次の(16)の場合、話し手と聞き手が数メートル離れている場面で話し手は聞き手の後ろにいるが、聞き手が遠くにある村を見ているということに気づき、その村を o で指示している。

(16) (登山の場面で、話し手は聞き手の後ろから、遠くにある村を見ている聞き手に対して)
{*bu/*şu/o}　köy-ün　fotoğraf-ı-nı　çek-e-yim　mi?
あの　村-属格　写真-3 人称単数-対格　撮る-意思形-1 人称単数　疑問形
あの村の写真を撮ろうか?

これらの用法を前節において述べた「共通の空間」という観点から見てみよう。(14)の場合、時計は話し手の空間からは独立した聞き手の空間にあり、非言語的方法によって(聞き手の)空間に導入された後、指示の対象となる。(15)では聞き手の居場所は、(14)と同じく、話し手の空間を含まない聞き手に近い空間ということになる。さらに、(16)では、(話し手によって)観察されているということに聞き手が気付いていない、と話し手が判断したため、指示対象(村)は話し手と聞き手によって共有されていない空間にあると考えることができるであろう。従って、(14)の時計、(15)の聞き手の居場所、(16)の村は話し手から見た場合、「非共通の空間」内の対象として見ることができる。

上の(14)-(16)では聞き手が対象の存在に気付いている(又は指さし等の直示的手段を用いなくても聞き手がその存在に容易に気付く)と話し手が判断した対象が「非共通の空間」に存在する場合、o を用いることを見た。これらの例はいずれも上記表 2、表 3 のケース③の o_1 の場合に当たる用例であると言えよう。一方、o は聞き手が対象の存在に気付いていないと話し手が判断した場合にも用いられる(上記ケース④の o_2 の場合)。(17)をご覧いただきたい。

(17) a. (話し手は遠い山脈のふもとにある村を指さしてその村の方向を見ていない隣にいる聞き手に)
Bak!　{*bura/*şura/ora}-da　bir　köy　var　uzak-ta.
見ろ　あそこ-位格　一　村　ある　遠いところ-位格
見て!あそこに村があるよ、遠いけど。(Tecer 2009:95(一部改変))

b. (登山の場面で、話し手は雲でぼんやりとしか見えない遠くにある居住地に気づくが、そこがイズミット県なのか確信を持てないので、指さしながら隣にいる居住地に気付いていない聞き手に聞く)

Pek net gör-ün-mü-yor ama...{*burası/*?şurası/orası}
あまり くっきり 見る-再帰形-否定形-現在形 けど あそこ
İzmit değil mi?
イズミットではない 疑問形
あまりくっきり見えないけど、あそこはイズミットじゃないか?
(Jansky 1980:97(一部改変))

(17a)では、話し手は対象の方を見ていない聞き手の注意を喚起した後(聞き手に対して「見て!」と言った後)、聞き手が気付いていないと判断した村をo系列で指している。又、(17b)では指さしを伴う行為と同時に、聞き手が気付いていないと話し手が判断した居住地を o 系列で指示している((17b)の場面設定及び波線部は筆者による[12])。聞き手が対象に気付いていないと話し手が判断した場合、対象を特定するには直示的な方法として指さしが用いられるが、o_2の使用に当ってはそれだけでは実は不十分であり、波線で示された言語的限定表現の使用が必要になる。このことは次の(18)の例を見るとよく分かる。

(18) a. Bak! {*bura/şura/*ora}-da bir köy var.
見ろ あそこ-位格 一 村 ある
見て!あそこに村があるよ。
b. {*burası/şurası/*orası} İzmit değil mi?
あそこ イズミット ではない 疑問形
あそこはイズミットじゃないか?

(18)の状況設定は(17)の場合と同様で、聞き手が対象の存在に気付いていないと話し手が判断した場合である[13]。(18)と(17)の唯一の違いは、(17)で波線で示した言語的限定表現の有無である。このことから、指示対象が話し手と聞き手によって共有されていない空間(非共通の空間)にあって、かつ聞き手が気付いていないと話し手が判断する場合(上記表2、表3のケース④のo_2の場合)、指示対象の特定を可能にするために指さし等に加えて何らかの言語的限定が必要になることを示していると考えることができる。同様のことは、次の(19)のデータからも観察できる。

(19) (遠く離れた山のふもとに家が一軒見える場面で、話し手がその家の方向を見ていない聞き手〈Ahmet〉に対してその家を指さしながら)
a. Ahmet! Biz {*bu/şu/o} kırmızı ev-de otur-uyor-uz.
アフメット 我々 あの 赤い 家-位格 住む-現在形-1 人称複数

[12] Jansky(1980)は(17b)がどのような場面で用いられるかという点に触れていない。
[13] (18ab)の場面設定を、話し手が聞き手が対象の存在に気付いていると判断できる状況に設定する場合には(上記表2、表3のケース③のo_1の場合)、(18ab)の容認判断はいうまでもないが次のように変ることになる。
(18)′ a. {*bura/*şura/ora}da bir köy var sanırım.
b. {*burası/*şurası/orası} İzmit değil mi?

アフメット!我々(僕)はあの赤い家に住んでいる。(Kissling 1960:134(一部改変))

b. Ahmet! Biz {*bu/şu/*?o} ev-de otur-uyor-uz.

アフメット 我々 あの 家-位格 住む-現在形-1 人称複数

アフメット!我々(僕)はあの家に住んでいる。

同じ場面設定で用いられている(19a)と(19b)において、何故(19b)では şu と o の使用に関して容認可能性の差が出るのだろうか? (19a)と(19b)における違いは、言語的限定表現(kırmızı)の存在の有無である。このことから、上記(17)、(18)の場合と同様に、o_2系列指示詞は指さし等の直示要素だけでは不十分で、対象の特定に当たって言語的限定要素を必要とするということが分かる。言い換えるならば、聞き手が指示対象に気付いていないと話し手が判断した場合(表2、表3の②と④の場合)、対象の指示に当たって şu を用いるか o を用いるかということで決め手になるのは、指示対象が指さし等の直示的な指示方法が重視される「共通の空間」にあると話し手が判断するか、又は指さし以外の非直示的・言語的な指示方法が重視される「非共通の空間」にあると話し手が判断するかということである。話し手が指示対象を「共通の空間」に存在すると判断し、かつ聞き手が気付いていないと判断した場合は、言語的限定要素は任意となり、指さしを伴うだけで şu 系列の使用が可能となる((18)の場合)[14]。これに対し、話し手が指示対象を「非共通の空間」に存在すると判断し、かつ聞き手が気付いていないと判断した場合、言語的限定要素が義務的となり、o_2系列の使用が可能となる((17)の場合)。このように考えるならば、Balpınar (2010)で指摘した şu と o の相補分布性は、単に空間の共通性の対立(şu 対 o_1)だけでなく、言語的限定要素の義務性の観点(şu 対 o_2)からも研究されるべきであると言えるだろう。

また、話し手の心理的状況から以上の文を見た場合、şu と o のニュアンスは次のように差がある。例えば、話し手がその村に前に行ったことがある場合やそこで生まれ育った場合に、心の中で指示対象に対して心理的共感性が生まれる。そこで、その村を şu で指示することによって聞き手にもその気持ちを伝えることができ、自分(話し手)と聞き手との間で一種の一体感(本稿で言う共通の空間)を作り出すことができる。一方、話し手は o 系列を用いた場合、指示対象に関する心理的共感性は感じられず、ただ聞き手にその村について現実的情報を与えることだけが目的となっている。従って、話し手は o を用いた場合、指示対象は最初から「非共通の空間」にあると考えても差し支えない。このような観察から、我々は şu が含意する共感性/共有性の存在と o におけるこの含意の不在が、şu と o がそれぞれカバーする空間の持っている特性と密接な関係があることを見てとることができる。言い換えるならば、話し手や聞き手は「共通の空間」内の対象により多くの共感/関心を持つということであり、şu と o に見られる共感性/共有性の含意の差は、それぞれの空間概念からの帰結であると位置づけることができるだろう。

---

[14] (19a)、(19b)のデータでは、指示詞 şu の使用に関して、言語的限定表現(kırmızı)の存在は我々の予測通り任意である。それでは、(17)のデータで şu が波線部の言語的限定表現と共起できないのは何故だろうか?その理由は、(17)と(19)で用いられている言語的限定表現の意味特性上の差にあると考えられる。(17)の波線部の言語的限定表現はその意味特性から考えて明らかに指示対象が「非共通の空間」に存在することを示唆するのに対して、(19)の波線部の言語的限定表現は意味特性上そのような示唆機能を持っていない。このように考えるなら、şu が、何故(17)で用いることができないのかは、şu を「共通の空間」内の対象を指示する指示詞であると位置づける本稿の仮説体系から容易に理解できるところである。

以上、(14)-(19)のようなデータからoの用法に関しては次の結論が導き出される。

(20) a. oは、bu及びşuと異なり、「非共通空間」の対象を指示する場合に用いられる。

b. oは、bu及びşuと異なり、聞き手が対象の存在に気付いている場合(o_1)にも、また気付いていない場合(o_2)にも用いられる。

c. 本稿で言うo_2は、他の3つの指示詞(bu, şu, o_1)と異なり、指さし等の非言語的指示だけでは不十分であり、言語的限定表現が義務的である点から考えて、直示性が弱いと考えられる。

d. o_2は、同じ場面設定で(相補分布的に)用いられるşuに比べて、心理的共感性/共有性が弱い指示詞であると考えられる。

ここで重要なことはoの使用条件である「非共通空間」性(20a)は対象の指示に当たって、指さし等の直示的な指示方法とは原則的になじむものではないという点である。何故なら指さし等の非言語的・直示的指示方法は、「共通の空間」の存在を前提にしてはじめて十分に機能する指示方法であると考えられるからである。o_2の持つ直示性の弱さ(20c)が「非共通空間」の指示詞であることの帰結として捕えることができるのならば、同様の直示性の弱さは同じ「非共通空間」の指示詞であるo_1の使用に当たっても観察されるべきはずである。この予測が正しいことは、(14)-(16)のo_1が指さし等の直示的指示方法と共に用いられた場合、その使用が極めて不適切なものとなってしまうことからも見てとることができる。今「非共通空間」内の対象は、その空間の特性上、(指さし等の直示的指示とは異なる)何らかの対象特定のための限定要件が対象指示のために必要とされると仮定してみよう。o_2の場合、これらの要件が言語的限定要素の付加であることは上で見た。ではo_1の場合、対象の特定のために話し手が利用する限定要件とは何だろうか?それは話し手が聞き手による対象特定が容易に行われると推測するに十分な非言語的な情報であると考えることができる。具体的には、(14)(15)(16)の場合、これらの限定要件はそれぞれ聞き手がポケットから時計を取り出すという非言語的な情報、聞き手の居場所という非言語的な情報、聞き手が山を見ているという非言語的な情報であると考えることができる。コミュニケーションの経済性を考えるなら、(14)(15)(16)において指さし等の非言語的な情報を更に付加するならば、o_1がその用法に当たって必要とする限定要件が非言語的な情報によって重複的に満たされてしまうために不自然になってしまうと考えることができる。一方、(17)で、o_2が指さしと共に用いられることは、oの限定要件が、聞き手が対象に気付いていないと話し手が判断することによって、言語的情報(下線された表現)として与えられていることと無縁ではない。何故なら指示対象特定のための限定要件として、言語的情報に加えて指さし等の非言語的情報を付加することは、条件の強化ではあっても、それが重複になることはないと考えられるからである。

以上の議論から、我々はトルコ語の指示詞o(o_1, o_2)は「直示優先の原則」が弱い指示詞であると結論付けることができるだろう(直示優先の原則とは「直示又は直示に近い手段(拡張直示[15])によっ

[15] 拡張直示は、例えば写真を見ながら「この人は誰ですか」という場合、写真の人を媒介に現実世界の中にある人を指すように、典型的な直示用法の拡張として考え得ることを言う。

て対象を指示できるならば、直示を使うことが優先される(金水 1999:76)」ということである)[16]。

最後に、o は直示用法において他の指示詞(bu 及び şu)よりも使用頻度が低いということも報告しておきたい。

表 4 異なる年齢グループにおける直示用法の指示詞の使用率(パーセンテージ)

	Bu	*Şu*	*O*	Total
Adults	36%	39%	25%	298
6-year-olds	63%	24%	13%	206
4-year-olds	53%	22%	25%	138

表 4 は Küntay and Özyürek (2002:341)より引用したものである。そこで、彼女たちはトルコ語母語話者の幼児(4-6 歳)と成人(大学生)との間で直示指示詞の使用がどう異なるのかということについて実証的に考察している。その考察結果の一部である表 4 から分かるように、6 歳の幼児及び成人の場合、一番使用頻度が低いのは o 系列である。このことは成熟した母語話者になるにつれて、身振りを伴う o の直示的使用頻度が bu, şu に比べて低くなること(o の直示性の弱さ)を示していると言えよう。

次節においては、指示対象が話し手(及び聞き手)にとって指示現場において特定不可能な場合について検討する。そのような場合に使用可能な指示詞は o 系列の指示詞だけであり、bu 及び şu 系列の指示詞は用いられないことをデータから確認した後に、こうした o 系列の指示詞の特徴も又、o が「非共通空間」の指示詞であり、従って直示性の弱い指示詞であることの帰結として捉えることができることを論じる。

5 特定不可能な対象を *o* で指示

トルコ語文法書の中には o は目に見えない対象(Jansky 1943、Peters 1947)、目前にない対象(竹内 1997)を指示するのに用いるという説明が見られる[17]。

(21) (テーブルの上に、手を伸ばせば、手に持つことができる距離に箱があるとする。この場面において、いきなり箱の中で何かが動き出し始める時、その中にある目に見えないものを指示して)

Aman tanrım! {?bu/*şu/o} da ne![18]

おお (私の)神 これ って 何

おお神よ!一体これって何なんだ! (Balpınar 2010:185)

[16] 一方、「共通の空間」の対象を指示する bu, şu の場合、空間の特性上直示優先の原則が働くと考える。

[17] 但し、(7b)及び(14)-(17)の用例は(「共通の空間」にない)話し手の目に見える(又は眼前にある)対象を o で指示するという点で Jansky (1943)、Peters(1947)、竹内(1997)の反例になる。

[18] この場合、bu も用いられるとする母語話者が存在する。しかし、その場合、bu で言及されるものは箱そのものであり、箱の中のものではないと考えている。

(22) (王様が森の奥深いところで兵士たちと一緒に狩をしている場面である。そこで、突然確認できないほど速いスピードで、ある物体が遠くから目の前を通っていく。王様は隣にいる兵に)

王様: Ne-ydi {*bu/*şu/o}?

何-過去形 あれ

あれは何なんだ?

兵卒: Etraf-ı-nı sar-dı-k.

周囲-3 人称単数-対格 囲む-過去形-1 人称複数

(あいつの)周りを包囲致しました。

これらの用例に関して、o が選択されるのは、話し手が驚き・恐怖のあまりか、そのものをできるだけ自分から遠ざけようとする意識が働いているからであると考えられる。しかし、次のようなケースを見てみると、o で指示されるものの特徴がより明確な形で見えてくる。

(23) (部屋の中の人がノックの音に対して)

Kim {*bu/*şu/o}?[19]

誰 あれ

(直訳)あれは、誰? (金水(他)2002:242、fn. 7) ({}内の表示は筆者による)

(21)では、上役の事務室に入る前にドアをノックした一人の事務員がいるとする。その場合、ドアの向こうに、事務所で働いている事務員のうち少なくとも一人がいると上役が推測しているとしても、その人が誰であるか上役(話し手)には確認できない。要するに、(21)～(23)の例に共通するのは、o で指示されるものは話し手にとって特定不可能なものということである。

(21)-(23)の用法を「共通の空間」という観点から見てみよう。(21)(22)では対象が話し手でさえ特定できないのだから、それを聞き手と同様な条件のもとで共有されている空間にあると考えること自体がそもそもナンセンスである。又、(23)では指示対象(ドアの向こうにいる聞き手)が話し手と独立した「ドアの向こう」という空間に存在するため、「共通の空間」は設定不可能であろう。従って、(21)-(23)の対象は「共通の空間」内に存在しないもの(つまり「非共通空間」の対象)として見ることができるのである。このように考えるならば、(21)-(23)の例において何故指示が指さし等の直示的指示方法を伴うことができないかについても容易に説明を与えることができるようになる。即ち、(21)-(23)の例における o は前節(14)-(16)の場合と同様に、対象が「非共通の空間」にあり、かつ聞き手がその存在に気付いている場合に相当し、従って本稿の仮説体系の中では o_1 のケースに当たると言える。この場合、話し手が、(21)では生き物らしいものの動き、(22)では確認できない

[19] 金水(他)(2002:242, fn. 7)では、この用例に関して「聞き手が確立していない場合は(şu という)談話導入標識が必ずしも要求されない」と指摘されている(括弧内は筆者による)。聞き手が確立していない場合、şu が現れないということに関しては、筆者も同意見である(Balpınar 2010)。しかし、(23)の場合、発話現場に聞き手が存在しているとしても(つまり、同じ部屋の中に話し手と聞き手がいて、ドアのノックの音を聞いた場合でも)、対象を şu で指示できない(筆者が事前に行ったインフォーマントチェックによる)。それは、本稿が示しているように、「非共通空間」の対象を指示できる特徴はそもそも şu に備わっていないからである。

物体が目の前を通っていく動き、(23)ではノックの音、という非言語的情報から聞き手が対象に気付いていると判断することによって、o_1の使用のための限定要件が満たされていると考えることができる。この意味で(21)-(23)のような場合に用いられる特定不可能な対象を指すoも又、本稿で言う「非共通空間」という概念の帰結として捉えることができる。

6 まとめ

本稿では、「共通の空間」及び「聞き手による対象の認識」という2つの観点から現代トルコ語の指示詞bu, şu, oの直示用法の体系について、素性分析の手法による交差分類を用いて検討した。その結果、現代トルコ語のo系列指示詞には次のような特徴があることが分かった。(i)「共通の空間」の対象を指示するbu, şu系列指示詞とは異なり、o系列指示詞は「非共通空間」内の対象を指示する指示詞である。(ii)o系列指示詞は聞き手が対象に気付いていると話し手が判断する場合(o_1の場合)だけでなく、聞き手が対象に気付いていないと話し手が判断する場合(o_2の場合)にも用いられる点で、bu, şu系列指示詞とは異なる分布を示している。(iii)o系列指示詞はその使用に当って、o_1、o_2ともに(指さし等の直示的指示動作とは異なる)非直示的な限定要件を伴って使用される直示性の弱い指示詞である。(iv)o系列指示詞にはbu, şu系列指示詞の場合に感じられる対象に対する話し手の側の共感性/共有性の含意が見られない。(v)o系列指示詞は特定不可能な対象を非直示的に指示できる点でbu, şu系列指示詞とは異なっている。更に上記特徴(iii)-(v)は、o系列指示詞が「非共通空間」の指示詞であるとする(i)の特徴の帰結であることを論じた。

参考文献

飯沼英三(1995)『トルコ語基礎』ベスト社

勝田茂(1986)『トルコ語文法読本』大学書林

金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』Vol.6, No.4, 自然言語処理学会、67-91

金水敏・田窪行則(1992)『日本語研究資料集1 指示詞』ひつじ書房

金水敏・岡崎友子・曺美庚(2002)「指示語の歴史的・対照言語学的研究－日本語・韓国語・トルコ語」『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会、217-247

柴田武(1991)「トルコ語のコソアの意味を求めて」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信 71』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1-2

阪田雪子(1971)「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『国語学論説資料』8-3、論説資料保存会、125-138

西岡いずみ(2006)『現代チュルク諸語の指示詞の研究』九州大学大学院平成17年度博士論文

服部四郎(1961)「コレ」「ソレ」とthis, that『英語青年』107-8、4-5

林徹(1984)「トルコ語の指示詞」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信 53』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、55-57

林徹(1989)「トルコ語のすすめ3-「これ・それ・あれ」あれこれ」『言語』18-1、大修館書店、96-101

林徹(2008)「トルコ語の指示詞şuの特徴」『東京大学言語学論集』第27号、東京大学文学部言語学

研究室、217-232

バルプナル・メティン(2006)『「BU,ŞU,O」の意味機能とトルコ語における指示詞体系について』麗澤大学大学院平成17年度修士学位論文(未発表論文)

Balpınar, Metin (2010)「トルコ語の指示詞-"şu"系列指示詞の機能を中心に-」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第29号、179-198

三上章(1970)「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版、145-154

堀口和吉(1978)「指示語の表現性」『国語学論説資料15-第4分冊』論説資料会、108-118

Banguoğlu, Tahsin (1959 [2004[7]]) *Türkçe'nin Grameri*. Türk Dil Kurumu.

Bastuji, Jacqueline (1976) *Les relations spatiales en turc contemporain; etude sémantique*. Paris: Éditions Klincksieck.

Emre, Ahmet Cevdet (1945) *Türkçe'nin bugünkü ve geçmişteki gelişimleri üzerine gramer denemesi*. İstanbul, Cumhuriyet Matbaası.

Ergin, Muharrem (2002) *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları.

Gencan, Tahir Nejat (2001) *Dilbilgisi*. Ankara: Türk Dil Kurumu.

Göksel, Aslı and Celia Kerslake (2005) *Turkish:a comprehensive grammar*.London/NewYork: Routledge.

Hayasi, T. (1988) "On Turkish Demonstratives", *Tokyo University Linguistics Papers 1988*, Department of Linguistics, Faculty of Letters, University of Tokyo, 229-238.

Jansky,Herbert (1980) *Lehrbuch der Türkischen Sprache*. Wiesbaden:Otto Harrassowitz.

Kissling, Hans Joachim (1960) *Osmanisch-Türkische Grammatik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish*. London: Routledge.

Küntay, Aylin C. & Özyürek, A.(2002) "Joint Attention and the Development of the Use of Demonstrative Pronouns in Turkish", In B. Skarabela et al.(eds).Proceedings of the Boston University Conference on Language Development, Somerville, MA:Cascadilla Press, 336-347.

Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Lyons, J. (1977) *Semantics 2*. Cambridge University Press.

Özyürek, A. (1998) "An analysis of the basic meaning of Turkish demonstratives in face-to-face conversational interaction" In Santi, S., Guaitella, I., Cave, C. and Konopczynski, G. (eds.) *Oralité et Géstualité: Communication multimodale, interaction*, Paris: L'Harmattan, 609-614.

Peters, Ludwig (1947) *Grammatik der Türkischen Sprache*. Berlin: Axel Juncker Verlag.

Underhill, Robert (1976) *Turkish grammar*. Cambridge: The MIT Press.

用例出典

Eldem, Burak (2004) *Seni Tılsımlar Korur*. İnkılâp Kitabevi.

Öğüt, T.Yılmaz (2004) *100 Diyalog*. Mitos Boyut Yayınları.

Tecer, Ahmet Kutsi (2009) *Bütün Şiirleri*. Bilge Kültür Sanat.

Properties of "o" Series Demonstratives in Modern Turkish
-Focusing on Deictic Use-

Metin BALPINAR
Humanities and Social Sciences Okayama University

Keywords: Turkish, demonstratives, shared space, deictic use, degree of deictic specificity

Abstract

In this paper, Turkish demonstratives will be analysed from the viewpoints of "shared space" and "recognition by the hearer", and it will be shown that the following characteristics are observed in the **o** series demonstratives in Modern Turkish: (i) they do not refer to an object that is far from the speaker and the hearer, but refer to an object that is outside of the "shared space", (ii) they can be used regardless of whether the hearer notices the object or not, (iii) there are cases where bare deictic signals such as pointing are insufficient for the appropriate use of **o** and some verbal bolsters are obligatorily required, (iv) when **o** and **şu** are both available, **şu** implies psychological affinity to the referred object on the part of the speaker, whereas there is no such psychological implication in the use of **o**, (v) the **o** series demonstratives can be used non-deictically in referring to an unidentified object (an object that cannot be seen or is not before the speaker's eyes). Finally, it will be demonstrated that the properties (iii), (iv) and (v) mentioned above are natural consequences of the property (i).

(バルプナル・メティン　岡山大学社会文化科学研究科)